

書評

紛争事例から得られた貴重な教訓が満載

長野 展久 著

[評者] 徳田 安春

筑波大学大学院教授／筑波大学附属病院
水戸地域医療教育センター・水戸協同病院総合診療科

『医療事故の舞台裏

25 のケースから学ぶ日常診療の心得』

この本は損害保険会社の顧問医師により書かれたものである。本書で記載されている25のケースはドキュメントファイルと呼ばれ、実際の医療紛争事例を臨場感あふれるドキュメンタリー風のケースシナリオにアレンジしたものであり、なぜ医療事故や訴訟に至ったかが丁寧に解説されている。数多くの医療事故での紛争を観察した著者ならではのことであるが、賠償金の支払いを巡って医師側に責任があるのかないのかなどについてのポイントがわかりやすく記載されており、貴重な教訓が豊富にまとめられている。

第一章では、診断での思い込みや見落としなどのピットフォール・バイアスによる診断エラーについてのケースファイルが収録されている。続く第二章では、患者さんや家族に対するインフォームドコンセントのあり方が問われたケースファイルが記載されている。そして第三章では、検査や治療のための医療手技に関連する事故についてのケースファイルが収録されており、CVカテーテルや内視鏡手技に伴う事故などで争われたものが集められている。

それぞれのケースファイルの項の最後には、教訓として箇条書きにポイントがまとめられており、読者にとってはこれからの診療の助けになる。例えば「コンビニ救急受診の患者さんの診療には注意を要する」ことなどが明言されており、リスクの多い現場の具体例を示してくれている。他科への紹介などへの注意点、

初診患者のバイタル測定的重要性も強調されており、評者も同感である。

症例のピットフォール例において特に印象的であったのは、検査にかなり依存した判断を行った場合に診断エラーが起こっているというケースが目立っていたことである。例えば、小児の重症細菌感染症に対して、初期CRP値が高値でなかったということで、重症度の判断を誤った症例がある。経験ある医師による重症感やバイタルサインによる判断を重視すべきである。また、大腸閉塞の患者に対して、腹部X線所見で便秘として判断を誤った症例がある。患者の病歴、重症感、身体所見を軽視し検査におぼれる誤診例であろう。

この書にはまた、11の有用なコラム記事がある。この中で法律用語がやさしく解説されており、また診療現場での医療事故を防ぐような簡単な工夫のポイントなどがある。医師が診断パフォーマンスをハイレベルに維持するために重要な点に、平静の心を保つ、というのが、オスラー先生講演集「平静の心」にも記載されている。本書にも同様に、自身の陰性感情に気付いたらまずは深呼吸するようにと、医師の感情的な動揺のコントロールの仕方などが記載されており、実践的で役立つアドバイスである。

A5 頁272 2012年
定価2,625円(本体2,500円+税5%)
ISBN978-4-260-01663-6 医学書院刊